きのふけふ（承前）

谷崎潤一郎

○

竹徑虛涼日影移
殘紅已化護花泥
鸚哥偶學啼鵑語
喚起叙鸞壓鬢低

一

毎年今頃、ちやうど此の詩の文句にふさはしい季節になると、私は自分の多くもあらぬ藏幅の中から此の一軸を取り出して壁間に懸ける。

そしてその度に昔此の詩を書いてくれた舊い支那の友人のことを想ひ出すのである。

此の詩は餘白に「乙丑除夕、書して谷崎潤一郎先生に應ず」とある。

大正末年二度目に上海に遊んだ折、舊曆の大晦日の晩に欧陽予倩の家で